

リレー連載

コバルトコーヌス クリニカルケース プレゼンテーション Vol.9

臨床ケースから読み取る新しい全顎欠損補綴術式の勘所

持病や服薬を抱える高齢患者への コバルトコーヌス治療

骨粗鬆症治療薬としてビスホスホネート系薬剤を
服用中の患者に対して咬合回復を行った症例

亀戸デンタルオフィス（東京都江東区）／博士（歯学）
奥田 祐司 Yuji Okuda

| 症例概要 |

患者：初診時70歳の女性

主訴：自治体の検診にて歯石を指摘され、歯石除去とメンテナンスを希望して来院した。
所見：痛みや腫れ、歯牙の動揺などはなく、咬合も安定していた。下顎の骨隆起などから咬合力の強さやクレンチングなどの習癖が推測された。SPT開始4年目に7]が浮くとのことで緊急来院された。

〉 はじめに

医療技術の進歩、公衆衛生、食生活、居住環境等の改善により日本は2020年で総人口1億2615万人となり、そのうち60～74歳が1742万人（14%）、75歳以上が1860万人（15%）となっており、あと数年（2025年には）で団塊の世代が全て75歳以上を迎える。75歳以上の人口は18%となり、超高齢社会に向かっている¹⁾ (図1)。

歯科診療においては、全身疾患を有する、何かしらの薬を服用されている高齢の患者が増加しており、外科処置を含む治療前には全身疾患に対する問診が極めて重要となっている。場合によっては、医療連携による情報共有が必要となることも増えてきている。マイ